

農業博物館と博物館協会大会

文珠 省三

元大阪歴史博物館運営課長（学芸員）

はじめに

本山彦一が富民協会の施設として建設した農業博物館についてはその存在は知られていたが、その規模・内容・活動等については明らかではなかった。今回のプロジェクトの調査により建物としての博物館の姿、博物館の展示内容及び活動の一端が明らかになった。

ここではまず新たに明らかになった資料を提示し、それを踏まえて農業博物館の展示及び活動と当時におけるその評価について述べたい。

農業博物館について

財団法人富民協会に設立された農業博物館は、1932(昭和7)年1月10日に起工し、同年7月10日に博物館建物が竣工、その後1ヶ月間で内部の展示をおこない同年8月10日に開館している。8月10日は、富民協会を設立し、農業博物館建設を主導した本山彦一の誕生日でもあった⁽¹⁾。

建物の建設期間6ヶ月、内部のケース・模型・ジオラマの設置、資料等の展示を1ヶ月という期間でおこなっており、建物の建築開始から開館までの期間が7ヶ月というのは驚くべき速さである。(図1・図2)



図1 農業博物館上空より



図2 農業博物館

農業博物館の施設及びその規模

農業博物館の内部は、地階に暖房汽罐室(ボイラー室)、展示室は一階に3室、二階に4室、三階に本山考古室、同じく三階には講演・映画会・展覧会をおこなうための講堂、講習会や団体入館者への説明をおこなうための講義室が設けられていた。その他、理事長室、協会事務室、貴賓室、会議室、書庫、休息室、エレベータ、便所が設置されている⁽²⁾。

1936(昭和11)年の段階で敷地 872 坪 0 合 2 勺 (約 2,882.647㎡)、建坪 379 坪 2 合 3 勺 (約 1,247.04㎡)、延坪 908 坪 4 合 3 勺 (約 3,003.07㎡) の規模を誇っている。

1936(昭和11)年の『農業博物館の第四年』に「本年度(博物館)正面柵外地 255 坪 8 合 8 勺 (約 845.88㎡) の貸下げを受けたるを含む」という記述があり、これ以降数値の変更がないため、敷地については前記の数値を使用している。

農業博物館の活動記録

農業博物館から刊行され、その活動状況を知る資料としては、1932(昭和7)年に開館し、一年後の1933(昭和8)年より隔年あるいは連続し『農業博物館の一年』、『農業博物館の第四年』、『農業博物館の第六年』、『農業博物館の第八年』、『農業博物館の第九年』、『農業博物館の第十年』、『農業博物館の第十一年』、『農業博物館の第十二年』として出版された活動の記録が残っている。現在の博物館・美術館等で毎年刊行されている年報・館報にあたるものと考えられる。

・記録期間

- ・『農業博物館の一年』 1932(昭和7)年8月11日～1933(昭和8)年8月10日
- ・『農業博物館の第四年』 1935(昭和10)年8月11日～1936(昭和11)年8月10日
- ・『農業博物館の第六年』 1937(昭和12)年8月11日～1938(昭和13)年8月10日
- ・『農業博物館の第八年』 1939(昭和14)年8月11日～1940(昭和15)年8月10日
- ・『農業博物館の第九年』 1940(昭和15)年8月11日～1941(昭和16)年8月10日
- ・『農業博物館の第十年』 1941(昭和16)年8月11日～1942(昭和17)年8月10日
- ・『農業博物館の第十一年』 1942(昭和17)年8月11日～1943(昭和18)年8月10日
- ・『農業博物館の第十二年』 1943(昭和18)年8月11日～1944(昭和19)年8月10日

となっている。なお、農業博物館の一年間の記録は、農業博物館の開館日及び本山彦一の誕生日である8月10日の翌日を起点に8月11日～翌年8月10日までを年間単位として、展示更新、入館者数、展覧会、講演会、移動博物館等の博物館活動記録を記載している。

次に農業博物館の活動状況を上記の出版物から観てみたい。出版されている上記活動記録の項目は、その記録により多少の違いはあるが、以下に説明する項目について記されている。

・農業博物館というところ

『農業博物館の一年』では「農業博物館というところ」という項目名になっているが、『農業博物館の第四年』からは「農業博物館の使命」に変わり、『農業博物館の第九年』からは「農業博物館の新使命」にかわる。特に使命が新使命に変わる頃は、日中戦争が本格化し、継続する農村の不況に加えて世の中は戦時色が一段と強くなった頃で、記述内容にも時代の変化を感じ取ることが出来る。

・農業博物館建設趣意書

本山彦一が農業博物館を建設するために関係者に呼びかけた協力依頼文で、毎回掲載されている。同文のため、『農業博物館の第四年』以降では省略した。

・工事概要

『農業博物館の第四年』以降では建物概要となっている。橋寺知子「財団法人富民協会農業博物

館の建築について」に述べられているため省略した。

・各階用途

『農業博物館の一年』にのみ記載がある。

・陳列の部門と陳列点数

『農業博物館の第四年』から「部門と陳列品について」に項目名が変更される。なお、この項目は活動記録が記されている年度の活動及び主要な出来事の概要が記載されている。また、『新日本農業の指標 農業博物館案内』⁽³⁾に記載されている室名・展示項目とその項目ごとの展示資料を、標本模型・特別模型・写真及び図・統計図表・その他の部門に分類しその項目ごとに点数を示し、それを合わせた、総合計点数を記載している。

なお、各室・各展示項目名は『新日本農業の指標 農業博物館案内』に記されているため省略した。ここでは展示資料の種類ごとにまとめて合計を記した。この点数の変化と上記の活動記録の各項目の記述により展示更新等の活動状況を知ることができる。展示室数は『農業博物館の一年』の記載では5室、『農業博物館の第四年』以降は7室、『農業博物館の第十一年』からは6室となっている。

・移動農業博物館

『農業博物館の第四年』より項目の記載がある。他の記述から開館四年目1936(昭和11)年からこの事業が始まったことがわかる。また、これより移動農業博物館における展示項目とその項目ごとの展示資料を、図表写真模型・標本の部門に分類し、その部門ごとの各点数とそれらを合わせた総合計点数が「陳列の部門と陳列の点数」内へ記載されている。

・貴顕名士の参観と入場者数

当時の総理大臣を始めとして政治家、政府官僚、皇族、高級軍人、経済人等の蒼々たる人物が来館していることをこの項目の内容から知ることができる。また、この項目の中で開館日数と各月ごとの入館者数が記載されている。各月ごとの入館者を合計し、開館期間とあわせて入館者数の合計を記載した。

・展覧会と講演会を通して

『農業博物館の一年』ではこの項目の中に小項目として「展覧会 講演会及び講習会」「土曜講座」「参考品貸出」の各項目がある。『農業博物館の第四年』よりこの項目は「展覧会と移動博物館」へと変更され、その中の小項目も「展覧会」「講演会及び講習会」「移動農業博物館」へと変更されている。

・展覧会と移動博物館

『農業博物館の一年』にある項目「展覧会と講演会を通して」が『農業博物館の第四年』より「展覧会と移動博物館」へと変更されている。この中の小項目も年度により変更や追加がおこなわれ、『農業博物館の第八年』『農業博物館の第九年』においては「興農二千六百年展覧会」という紀元節を記念した展覧会を開催し、各地を巡回したことが記載されている。

・観覧規定抜粋

開館以降、変更がおこなわれていないため省略。『農業博物館の第十二年』では変更された記載があったため掲載。

以下資料を順次提示する。

資料①

財団法人富民協会農業博物館『農業博物館の第四年』付属パンフレット⁽³⁾

新日本農業の指標 農業博物館案内 財団法人 富民協会

農業博物館というもの

白砂青松！絶好の景勝地濱寺公園の一角にそそり立つ本農業博物館は、日本農村大衆の生きた指標としてどこまでも農民の実生活に食い込んだ日本農業の一大殿堂である。大衆とともに生きる生命の躍動と気魄はやがて不況農村克服の原動力をなすものであらうことを確信する。見よや独自の境地にあって最新農学の粹を集めてなる陳列の数々を！総面積九百余坪、陳列面積五百余坪、二百に余る陳列ケースに盛られたる農業資料の数々は、その斬新澁澗たる陳列方法と相俟っていやが上にもわが国最初の農業博物館の光栄を価値づけるものである。昭和七年一月十日起工して以来僅かに僅かに七ヶ月、電光石光の勢いで八月十日かっきり竣工開館したのである。正にスピード時代に相応しい実現であった。以来まさに五年、内容は日とともに洗練と充実を加へ、いまや容易に見得ざる幾多の資料を收藏する一大産業科学博物館をなすに至った。

農業博物館の光栄

さらにわが農業博物館が無上の光栄とするところは昭和七年十一月十一日、とくに小出侍従を御差遣の光栄を賜り、さらには高松宮殿下、梨本宮殿下、東久邇宮殿下の台臨を辱ふした齋藤首相、山本内相、荒木陸相、後藤農相、鳩山文相、山崎農相、清浦伯等の貴顕名士を迎へたことであつた。われらはこの光栄に一段の感激を加へ内容の充実に精進しつつある。

陳列の七大部分門

陳列は次の七大部分門に分たれている。

第一階（図3）

第一室 皇室 農業の部

第二室 土壤肥料部 一、土壤 二、肥料

第三室 農産部 一、普通作物 二、工芸作物 三、園芸 四、植物生理 五、品種改良

第二階（図4）

第四室 農政経済部

一、農業統計 二、農業経営 三、農産物販売 四、農業行政 五、比較農業

六、農業能率農事電化

第五室 副業部

一、農民芸術品 二、養蚕 三、畜産 四、竹林 五、山林 六、水産

第六室 拓殖農業の部

一、朝鮮 二、台湾 三、満州 四、樺太 五、南洋

第七室 外国農業の部

一、豪州 二、米国 三、北支

第三階 本山考古室、講堂、講義室 (図5)

博物館を見る順序

正面の階段を上って館内に入ると左手に案内所がある。いろいろな御質問に応ずるほか絵葉書や富民協会の刊行物、各地の農民芸術品などの即賣も行って観覧者の便宜をはかっている。

皇室と農業 この一階中央を占めるのが皇室と農業の部である。農民精神作興のため特に皇室がいかに農業に御関心あらせられているかを示したもので、まづ正面中央に荒谷芳雄氏作農神像を安置しこれに対するものに農業に対する敬虔の念と上に親しむものの歓喜とを体得せしめる。正面壁面には畏れも今上陛下大書祭御親裁、明治天皇收穫天覧昭憲皇太后田植台覧の三大壁画を奉掲し感激はなほさらに新たとなる。それに対して、齋庭の稲稼、仁徳帝御仁政、班田收授、清和天皇と動農、太閤検地、徳川中期の興農の六枚の壁書によって日本農業の光輝ある歴史を振り返る。順路を表側に出ると中央両ケースには御親裁田御写真、梨本宮殿下御染筆の「致中和」の御額を拝し、神宮神



図3 農業博物館一階展示室



図4 農業博物館二階展示室

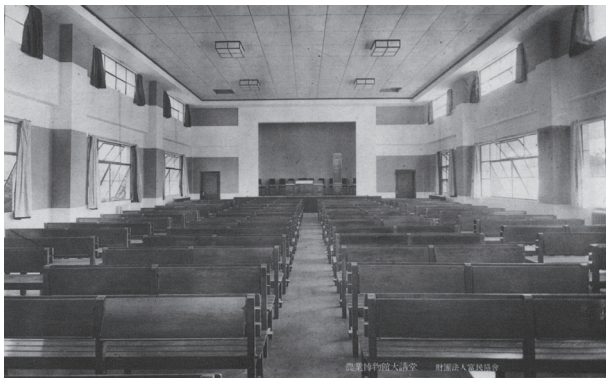


図5 講堂



図6 土壌の組織模型

域において自生した「瑞垣」の稲穂と籾を見ては農業日本の認識を深くする。

土壌 ここでは土に関する一通りの知識が得られる。岩石と土壌のケースによって土のできるまでを知り、土壌の組織の模型によって地上と地下の関係を究め、土壌と作物、日本地質立体図によって耕すものの基本を知る。(図6)

肥料 肥料はどうしてできるか、といふ疑問を解決してくれる販売肥料の製造工程、自給自足を促す自給肥料、なぜ作物に肥料が必要かを教へる水稻と肥料、肥料はどう吸収されるかを動的に示す窯素肥料肥効遅速の点滅器、肥料三要素試験、さらに肥料施用の基礎を教へるリービッチ最少養分律の噴水塔、肥料成分早見表、大豆粕製造の油房工場の模型などで農業に従事する人々に種を下すまでの土と肥料の基礎知識をつくり上げる。(図7)

米と麦 第二室農産部普通作物の冒頭に農産物と日常生活のジオラマによってわれらが日々農産物の恩恵をいかに受けつつあるかを消費者の立場からハッキリ教えられる。米の貯蔵と加工、米の尊さなどにつづく中央部には、見逃してはならない富民協会の米麦多収穫奨励の一廓がある。北側には十石を実収するまでの魔法鏡、西側には前後六年に亘る競作の成績、南側には米になるまでの活動写真、東側には小麦競作の成績、いずれも栄冠に輝く人々の成績を偲ぶことができる。薄播と厚播、深水と浅水、深と浅植の試験成績等をあつめた水稻栽培の研究、三分間で米の一生を見せる。米から米への巧妙なドリームランド、米麦の病虫害があり、どんな米を作ったらよいかといふ疑問は各府県の標準米、全国の水稻多收品種で解決される。各府県の米麦優良品種および小麦多收品種などすべて貴重な蒐集ならざるはない。(図19)

工芸作物 野生の実物にもまさる形態模型に驚葉草、これにつづく煙草、樟脳、除虫菊、薄荷、油蠟科類、萱苔などいづれ劣らぬ有利作物として推賞されるもの、左折して藺草や輸出の重鎮製茶、茶のできるまでの模型、杞柳および羊歯、甘藷、綿、麻、製紙、ヘチマなど一巡すると今後自給作物としてまた輸出作物として、或はまた輸入防遏作物として必要なものや、自分の地方に適する作物の知識を充すことができる。(図8)

品種改良 作物の品種がどうして改良されるか、この疑問を解くために京大教授竹崎農学博士は特に大麦の穂長と芒の遺伝やもつれ稲の遺伝標本を出陳され、朝顔の花色と葉色に現はれた形質遺伝



図7 肥料の三要素試験



図8 工芸作物(油脂)

の法則の点滅装置を指導された。玉葱の近親繁殖における品質の低下、水稻、胡瓜などの品種改良のごとき、近時目覚しい発達を遂げた業績が展開されている。つづいて故九大教授高山卓爾氏の研究になる小麦の根群や、蜜柑と葡萄の茅條変異など植物生理の一部門がある。

蔬菜花卉 蔬菜の種子、栽培、加工について、普通蔬菜、特殊蔬菜二個のケースが連なり、花卉園芸の部門には花卉栽培の経営状況が一目で解るジオラマがある。また春秋に繁殖する各種花卉の形態模型を陳列している。

果樹 一階北部の一郭は果樹園芸で蜜柑王国の大ジオラマについて柑橘、桜桃、いちぢく、りんご、柿、梨、ぶどう、桃、梅、びわ、栗主要十一果樹が各別に精巧な果実模型と、花から実までの模型と加工品によって陳列されている。各果樹の説明、栽培法、收支計算、生産統計などによって一目瞭然と、初心者にも果樹園芸の現勢がのみこめる。果樹蔬菜の病虫害駆除とわが国果実生産地を現はす点滅地図など、さらに光彩を加へて陸離たるものがある。(図9)

正門 入ってまづ目にとまるのは富民協会創立者故 本山彦一翁の銅像である。日本農村更生を叫んで起たれた翁の面目躍如たるものがある。作者は彫刻界の権威朝倉文雄氏、碑銘は翁と親交五十年の故内閣総理大臣犬養毅氏の揮毫、碑文は一代の文豪徳富蘇峰氏の選書である。

一階を終わって二階に上ると階段正面には日本農業の姿を模型化した日本農業現勢模型があつて日本農業の現勢はもちろんその動向をも容易に大観できる。

農政経済 栄える村と衰える村の四季回転ジオラマが現実の農村の姿を見せている。衰える村も栄えるようにと農村更生の資料はむろんのこと、農家経済調査、産業組合、精農の一日、共同の村は栄える、富民協会表彰優良更生農村資料、優良組合の事蹟などそれぞれの資料が充たされて農村更生の大道を明示している。(図10)

副業 畜産、林産、水産、竹材加工、養蜂など農家の副業に必要なものが標本や模型とともに

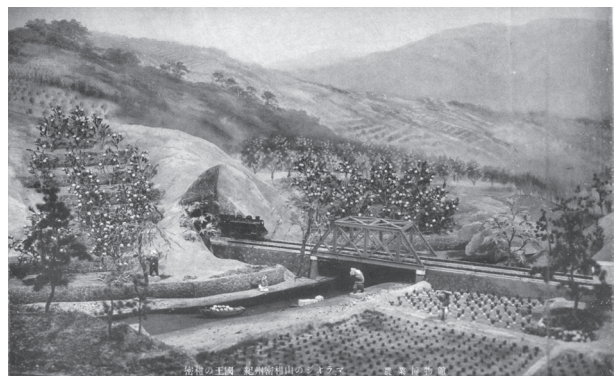


図9 紀州密柑山のジオラマ

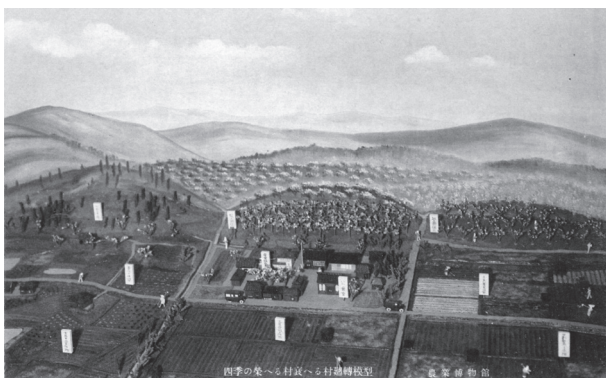


図10 四季の栄へる村衰へる村回轉模型



図11 樺太の森林開拓ジオラマ

陳べられている。特に畜舎を作り豚、山羊、羊の剥製を自然の姿に飼養し小動物を形づくっているのは興味ぶかい。竹林繁殖、松茸の生態模型、各地各国の農民芸術製作品がさらに光彩を添へてこれにつづく。

拓殖農業 二階南端の一廓が拓殖農業である。朝鮮の部には珍しい綿作、干拓地の大型模型、水利事業などがあり、興味ある陳列である。台湾では糖業ジオラマ、二十余尺の甘藷全体標本、蓬萊米や甘藷、樟腦、熱帯果実など南国の豊富な農産風景を満喫させるものがある。(図 11)

満州 満州国は今後ますます有望な農業移民地として渴望されているだけに註目すべき陳列に充ちている。満州国農業現勢、播種模型、秋の農家模型、収穫時の満州等一目瞭然たる興味深い陳列や、農産、養蚕、林業及び大豆加工等あらゆる資料で満蒙らしい大農気分を偲ばせている。

ついで樺太、北海道の各資料さては南米ブラジルやアルゼンチンの農産物こそ興味深く観覧者の足を止めさせる。別室には豪州の羊毛、農産物、各国の果実模型が並べられ天候に恵まれた彼地の農産物に眼を見張る。この室を出ると南洋の椰子やコプラなどがそれぞれ異なる地方色を見せている。

養蚕 副業の所をもとに帰って右折すると新時代の養蚕のジオラマがある。屋外條桑育や箱飼いひななどこれからの養鶏家の進路である。農林省産業試験場や郡是製糸の出品など斯業家にとって貴重なる資料であろう。

さらに進めば雛鳥の雌雄鑑別模型、最新式育雛器など幾多貴重な養鶏資料がならび、食用鳩が愛らしい姿を並べている。農事電化の模型、どうすれば作業が早くできるかという農業能率の研究、各自の力を試す荷握力計などがこれにつづき、生活改善の部に入る。ここには農村婦人作業服のジオラマ、農村料理の改善模型が目覚めた農家の築きつつある新農村文化を如実に語っている。改良便所、改良前後の墓所比較模型から東南の一廓を占める実物大の改善農家墓所に至ると、一層この感は深くなる。

これに対する一廓には電気応用の府県別産業地図、輸出入農産物などの展示があり日本農業の真の姿とその明日の進路がまざまざと指示されているのである。

本山考古室 三階には故山本理事長の蒐集になる出土品を陳列し、特に斯道の研究家のみ公開されている。点数二万、わが国考古学会の誇る一大集成である。

講堂と講義室 諸種の講演、映画会や展覧会や展覧会場に充てるため三階に七十坪の講堂がある。収容人員五百名に上る。このほか講義室を有し百名内外の講習会や入場団体への講話等に使用しつつある。両室とも映画暖房の設備を有し、一般希望者の使用に供せしめつつある。

観覧案内

一、本館の観覧料は左記の通りであります。

大人 一人一回 十銭

小人 一人一回 五銭 (十二才以下六才以上)

団体 一人一回 五銭 (二十人以上にして引率者のあるもの)

但し、小学校見学団体にして引率者のあるものは無料とします。

二、本館は左記の時間開館します。

三月十六日より十一月末日まで

自午前九時 至午後五時

十二月一日より三月十五日まで

自午前九時半 至午後四時半

但し、月曜日は休館します。

以上が、『農業博物館の第四年』に付属していたパンフレットを翻刻したもので、展示を観覧する順路と大小の項目ごとに簡単な説明を加え、掲載されている、今回別図で示した一階平面図と二階平面図とを合わせて観ることにより観覧者の理解を助けるものとなっている。(図12・図13)

このパンフレットは、現在一般的に博物館・美術館において無料配布されている展示案内にあたるものと考えられる。

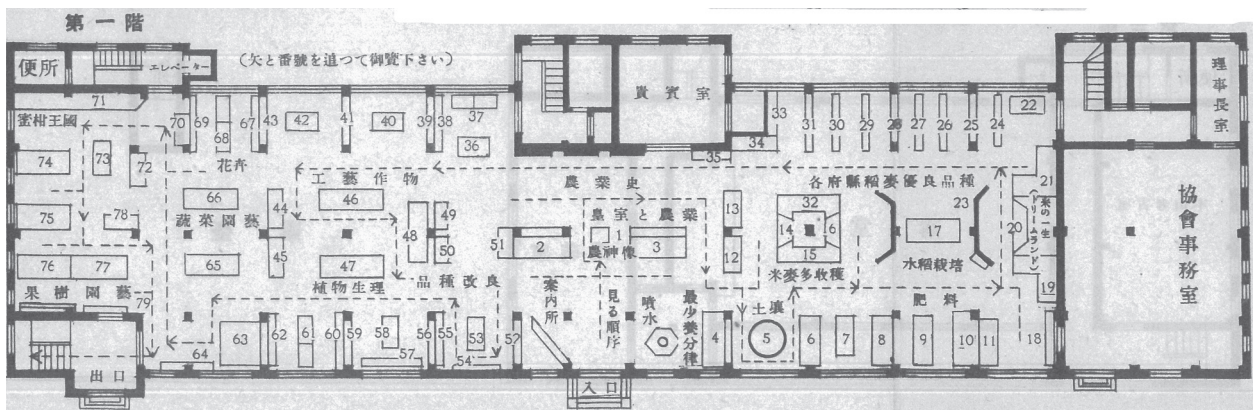


図12 農業博物館一階平面図

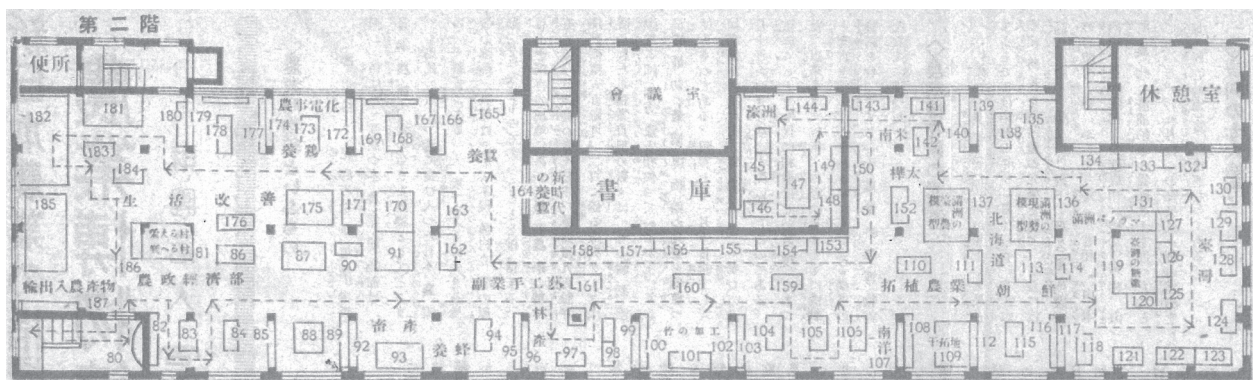


図13 農業博物館二階平面図

資料②

農業博物館の一年⁽⁴⁾

農業博物館というところ

白砂のステージに青松踊る。絶好の景勝地浜寺公園にそそり立つ、わが農業博物館こそは、日本農村大衆の生きた指標である。どこまでも農民の実生活に食い込んだ日本農業の一大殿堂である。大衆とともに生きる生命の躍動と気魄はやがて不況農村克服の原動力をなすものであろうことを確信する。即ち本館の建設趣意書こそ、わが博物館の大使命を最もよく述べている。

農業博物館建設趣意書

我国は農をもって国本とし、人口の殆ど半数が農業に従事している。これがため農業の盛衰は国力の伸展に影響すること極めて大である。歴代の政府もこの点に鑑み夙に農事の改良発達に努め、農業に関する大学専門学校等も各地に存するのであるが、現在農業に従事しつつある農村大衆の実物教育に資する完備した農業博物館というものが一も存しない。大衆教育の上に、博物館の効果顕著なることは、今更言うをまたぬところで、大は帝室博物館、科学博物館、工業博物館、市民博物館等より、さらに細分されて、鉄道博物館、演劇博物館等の如き、専門的博物館などに至るまで存せざるなく、然もそれらの博物館が斯業発達に貢献するところ少なからざるにもかかわらず、ひとり国民半数の利害休戚に關すること最も大であって、国家産業の大宗を占める農業に於いてのみ、斯の如き博物館の存在を見ないのは国民経済の大局よりしても吾人の痛嘆禁ぜざるところである。我が財団法人富民協会は設立以来正に四年、専ら農事の開発に専念し、或いは試験農場の経営に、或いは米麦の多収穫奨励に、農民芸術品の展観に、精農、優良農事組合の表彰に、更に進んでは全国の農村青年を集めて農業経営改善の講習を開く等、各方面に農業界の向上進歩に資してはいるが、農業の大衆教育といふ一点に就いては、自ら遺憾とする所が少なくなかった。ここに於いて竿頭一步を進め、一般農村大衆の現代農業科学に対する知識の涵養と、実物による農業に於ける成人教育の徹底を期するため、自らの微力をも省みず、進んで農業博物館を建設し、これを無料公開し、以て邦家農業の指導啓発に資せんことを企図するに至った。もとより博物館経営の事は、国家の大をもってするも至難事中之至難に属するものである。況んや微力なる本協会の能くならずところではないが、その経営の方法に至っては、最新の学理を究め、努めて農民の実生活に接触し、陳列品の生態状況を動的に具現し、以て季節を超越せる一大実物教育の殿堂たらしめんことを理想とする。随って陳列展観に於いても所謂在来の博物館に見る陳腐なる羅列主義を排し、清新発瀾独自の境地にあって、現代日本農業の経営に必要な気魄と、科学の生ける指標を示さんことを期してをるのである。これがため本博物館の事業としては、啻に農業関係品を陳列展示するのみでなく、或いは講演、講習により、或いは活動写真により、実地適切なる農業上の活教育を施し、一路所期の目的に邁進せんとするものであって、其規模狭小たりと雖も本館の創立が、我国農業の開発に貢献するところ、蓋し甚大なるべきを確信するものである。願わくは我等の微意を賛せられ、大方諸賢の高援を切望するものである。

工事概要 (省略)

各階用途

地階	暖房汽罐室(ボイラー室)
第一階	第一陳列室 貴賓室 理事長室 事務室 応接室 外套室 宿直室 物置 便所二ヶ所、階段四ヶ所 エレベータ室
第二階	第二陳列室 会議室 図書閲覧室 書庫 休息室 便所二ヶ所、階段四ヶ所 エレベータ室
第三階	第三陳列室(特別室) 講堂 控室 講義室 予備室二ヶ所 便所、階段四ヶ所 エレベータ室 露台
屋上	物置二ヶ所 階段室 エレベータ機械室 特別階段 露台(但し講堂及び物置を除く)

陳列の部門と陳列点数

農業博物館の建設が決定すると、協会では早速博物館陳列草案を作成して、陳列の系統をたて、斯界の専門権威に批判を乞ふたのである。陳列品の蒐集作成はその草案に基づいて行われた。陳列も考案も悉く独創的の見地から、西村主事指揮の下に、山本技手主として陳列意匠、図表を担当し、後藤技手主として佐々木技師等指導の下に標本の蒐集作成に当たり、自余の職員これを補佐したのであった。半歳の努力は見事に酬われて開館当日館内空隙を見ざるまでに陳列品は充たされたのであった。

陳列室は一階、二階及び三階の一部に設備され、一階は第一室土壤肥料部、第二室農産部、二階は第三室農業経済部、第四室副業部、第五室拓植農業部である。三階の一部には本山考古室がある。各部門の点数は次の通りである。

各部門 種類ごとの展示資料数

標本・模型：4,530点、特別模型：47点、写真・絵図：706点、統計図表：148点	
	合計 5,431点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列模型

本山考古室(点数等の記載なし)

農業博物館三階北端にあり故本山前理事長三十年間の苦心の結果蒐集された我国考古学上貴重な役割をなす陳列品により満たされ、特別研究家にのみ参観を許すことになっている。

貴顕名士の参観と入場者数(貴顕名士の入館日は省略)

農林大臣 後藤文雄氏、伯爵 清浦奎吾氏、文部大臣 鳩山一郎氏、総理大臣 齋藤 実氏
陸軍大臣 荒木貞夫氏、内務大臣 山本達郎氏、大谷光瑞氏、伯爵 東伏見邦英氏
前司法大臣 渡邊千冬氏、徳富猪一郎氏、農学博士 新渡戸稲造氏、伯爵 堀田政恒氏
朝鮮総督 宇垣一成氏

開館日数 309日間 入場者数 68,417名(団体 431組 27,619名、個人 40,798名)

展覧会 8 回 (33 日間)、講演会及び講習会 8 回 (195 日間)、土曜講座 10 回 (10 日間)

展覧会

10 月 1 日より 5 日間	全国農学校生徒作品展
10 月 8 日より 5 日間	秋の果実即売会展
12 月 1 日より 1 週間	自力更生展
2 月 10 日より 3 日間	ロシア農民芸術展
3 月 11 日より 2 日間	松陰翁遺墨展
3 月 24 日より 3 日間	春の花弁園芸展
4 月 7 日より 3 日間	満蒙農業展
5 月 3 日より 5 日間	苗代展

講演会及び講習会

8 月 13 日より 5 日間	第四回農業夏季大学
8 月 17 日	第三回農業改善研究会開校式
9 月 22 日	農村自力更生会講演会
10 月 15 日	農村婦人愛読者大会
1 月 2 日より三か月間	長期農業講習会
3 月 11 日・12 日	全日本富民研究会大会
3 月 11 日	本山理事長慰霊祭
8 月 2 日より 5 日間	第五回農業夏季大学

土曜講座

9 月 3 日	水稻虫害の予防について
9 月 10 日	秋播蔬菜の虫害駆除
9 月 17 日	緑肥の栽培について
9 月 24 日	秋播草花の作り方
10 月 1 日	都会生活と農村生活
10 月 8 日	松茸の人工栽培
10 月 29 日	小麦増収栽培
11 月 5 日	農産物販売
11 月 12 日	新しい漬物の漬け方
11 月 19 日	新しい肥料の使い方

この他、7・8月に毎週土・日曜日 午後 2 時 30 分よりサマーサービスとして自然科学に関する活動写真を数巻上演、入館者に無料公開

参考品貸出

10 月 5 日	広島県主催中国四国副業展
10 月 27 日	慶尚南道主催時局匡救産業展
11 月 15 日	秋田県主催種子交換会

11月26日	京都府農林学校主催木津農産物品評会
4月3日	田原農業補修学校主催農事振興展覧会
4月20日	産業組合主催産業組合資料展覧会
5月5日	秋田県鷹巣農林学校主催農林展覧会
7月26日	和歌山県西牟婁群養蚕業組合主催展覧会
8月6日	新潟県中頸城軍農会主催農村更生展

観覧規定抜粋 (省略)

資料③

農業博物館の第四年⁽⁵⁾

農業博物館の使命

我が農業博物館こそは、不況を打開し躍進せんとする日本農民大衆の生きた指標であり、光明である、飽くまで農民の実生活を基底とし、それに食い込んだ農村人の一大殿堂であり、また大衆を対象とし農民とともに生きる生命の躍動と進取への気魄はやがて農村不況克服へのモメントをなすものである。すなわち本館の建設趣意書こそ、本博物館の使命をよく表わしている。

農業博物館建設趣意書 (省略)

部門と陳列品に就て

農業博物館の建設が決定すると協会では直ちに博物館陳列草案を作成して陳列の系統たて、斯界の専門権威を委員とする博物館委員の議に附し、陳列品の蒐集作成に着手したのである。

陳列すべき標本模型はいずれも極めて地味な、時として當業者にさえ興味を持ち得ない農産物とその加工品を主とするために、これを現代化しこれに光る、動く活力を与え、観覧者をして一瞬のうちに味得せしむべく考案し努力を払った。幸ひに建築着手より開館までの僅か半歳の期間に内容を整えた昭和七年八月十日堂々開館し江湖の喝采を博したのであるが、ここに満四年常に内容の改善充実に努めて来た。今年度はとくに農民精神作興に資するため宮殿下の御下賜品を奉載し或は宮内省御下賜品をもって皇室と農業部を新設し又各陳列全般にわたり大改造を行った。尚、一昨年度より創設したる移動農業博物館もまた活動期に入り内容の充実と共に貸出回数は激増した。

本館陳列室は一階、二階、三階の一部に設備され、一階は第一室 皇室と農業部、第二室 土壤肥料部、第三室 農産部、二階は第四室 農政經濟部、第五副業部、第六室 拓植農業部、第七室 外国国農業部とし、三階の一部を本山考古室としている。

各部門の点数は前年に比し減少を見せているのは不用と目されるものの整理淘汰を敢行する一方、系統的充実に努め多数の更新を行ったのによる。また新に大阪府より正面の柵外地

二百五十五坪余の貸下を受け庭園を築造し、その一部に蔬菜の見本園、水稻の優良品種圃を設けて、観覧者の参考に供することとした。開館第四年現在の陳列点数は次の如くである。(1936(昭和11)年8月10日現在)

各部門 種類ごとの展示資料数

1934(昭和9)年度 標本模型数：6,576点 特別模型数：56点 写真及び図：725点

統計図表：224点 その他226点 合計7,807点

1935(昭和10)年度 標本模型数：5,781点 特別模型数：72点 写真及び図：746点

統計図表：161点 その他161点 合計6,921点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列模型を包括す

移動農業博物館

部門 イ、拓殖農業 内訳：満州 南米 朝鮮 台湾 ロ、多収穫 ハ、土壌 内訳：土壌 肥料
ニ、副業 ホ、生活改善 ヘ、経済更生

1936(昭和11)年度 図表写真模型：188点 標本：366点 合計554点

本山考古室

農業博物館三階北端にあり故本山前理事長三十年間の苦心の蒐集を展観し我が国考古学上貴重な役割をなす陳列品数千点、特別研究者にのみ参観を許している。

名士の参観と入場者（貴顕名士の入館日は省略）

高松宮殿下、農林大臣 山崎達之輔氏、農林経済更生部長 小平権氏一、大阪府知事 安井英二氏
和歌山県知事 藤岡長和氏、シヤム国前経済大臣 プラ・サラス氏、豪州前商務大臣 テイボ氏

開館第三年度(1934(昭和9)年8月11日～1935(昭和10)年8月10日)

開館日数：308日間 入場者：23,793名

開館第四年度(1935(昭和10)年8月11日～1936(昭和11)年8月10日)

開館日数：309日間 入場者：31,123名 前年比：7,330名の増加

展覧会と移動博物館

博物館の機能をよりよく發揮するために陳列品に拘泥することなく、各種の展覧会や講演会を開き入場者の啓発に努めているが、今期に特に群小の催を避け、とかく農村で等閑にされ勝ちの生活改善に関する問題を取扱った、農村文化展覧会を開いた。更に一般入場者のために博物館週間の催しとして映画の会を行い更生農村資料展を開いた。

なお、積極的には地方にあって本博物館の惠澤に浴し得ない人々のために予てより申込に応じて移動博物館を貸出して、農業知識の向上に資するところがあつたが、本期間の活躍は特に目覚しいものがあつた。更に大毎主催輝く日大本博覧会に「躍進日本」「豪州の農業」の二大出陳をして気をはいた。今期のこれらの活動は次の如くであつた。

展覧会3回(55日間) 講演会及講習会3回(92日間) 移動博物館26回(26日間)

展覧会

10月1日から5日間 農村文化展覧会 (図14)

4月10日から50日間 輝く日本大博覧会「躍進日本」「豪州農業」出品⁽⁶⁾ (図15)

10月20日	更生農村資料展覧会
講演会及講習会	
10月20日	優良更生農村表彰式
10月20日	経済更生講習会、農林大臣山崎達之輔氏
1月15日から3ヶ月間	第8回長期農業講習会
移動農業博物館	
9月10日	島根県太田町農学校教育資料
9月13日	和歌山県青年連合会展覧会
10月1日	大阪松阪屋エチオピア展覧会
10月23日	山梨県峡北農学校農業展
11月2日	大阪府立黒山農学校実業教育50周年記念展覧会
11月3日	福井市商工会議所エチオピア展覧会
11月7日	大阪市商科大学学術展覧会
11月7日	大阪松坂屋絹の文化展覧会
11月7日	福島県相馬農蚕学校更生展
11月15日	愛知県瀧実業学校10周年記念展覧会
11月28日	岐阜県養老郡農会国防と産業展覧会
4月11日	愛媛県越智郡農会農業思想普及会
5月22日	大阪府立農試験改築記念展
8月10日	樺太庁樺太拓殖共進会
(他12件)	

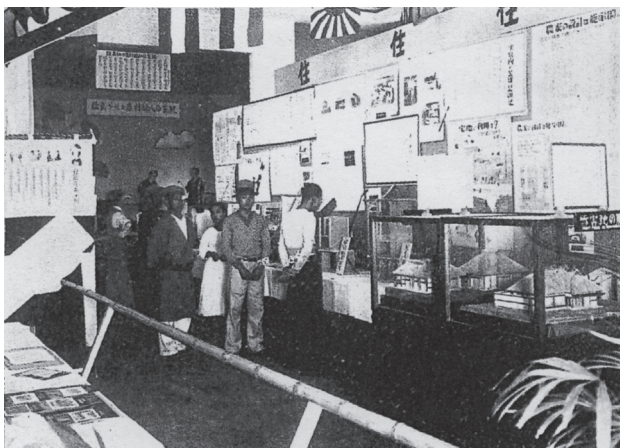


図14 農村文化展



図15 輝く大日本展覧会

資料④

農業博物館の第六年⁽⁷⁾

農業博物館の使命（省略）

我が農業博物館こそは、非常時局下に躍進せんとする日本農民大衆の生きた指標であり、光明である。飽くまで農民の実生活を基底とし、それに食い込んだ農村人の一大殿堂であり、また大衆を対象とし農民とともに生きる生命の躍動と進取への気魄はやがて不況農村克服へのモメントをなすものである。すなわち本館の建設趣意書こそ、本博物館の使命をよく表わしている。

農業博物館建設趣意書（省略）

部門と陳列品に就て

農業博物館の建設が決定すると直ちに博物館陳列草案を作成して博物館委員の議に附し、陳列の蒐集作成に着手したのである。陳列資料は地味な農産物を主とするために、これに光る、動く活力を与え観覧者をして一瞬のうちに味得せしむべく考案し努力を払った。昭和7年8月開館し江湖の喝采を博したが、以来ここに満六年常に内容の改善充実に努めて来た。今年度は特に高松宮殿下が農山漁村事業御奨励の畏き思召で兼ねて御設定遊ばされた有栖川宮紀念厚生資金から本協会に二月二十六日金一封を下賜せられたるをもって博物館陳列の上にこの感激を表さんとして明治天皇御製中より農を詠ませられたもの四首を選び図解掛図を春、夏、秋、冬の四部作に謹製し皇室と農業部に奉掲し同部の充実を期した尚各陳列全体にわたり標本の補充改正に努め北支資料の陳列を加え時局認識に寄与した。又移動農業博物館も修理改正を行い、園芸部の新設をなし内容の充実と共に各方面に多数利用される様になった。

本館の陳列は一階、二階、三階の一部に設備され、一階は第一室皇室と農業部、第二室土壤肥料部、第三室農産部、二階は第四室農政経済部、第五室副業部、第六室拓植農業部、第七室外国農業部とし、三階の一部を本山考古室としている。

各部門の点数は前年に比しやや減少を見せているのは不用と目されるものの整理淘汰を行い、新資料との入替をなし、一方系統的充実と時局に呼応した陳列と多数の更新を行ったによる。また一昨年大阪府より正面柵外地二百五十五坪余の貸下を受け、庭園を築造し一部蔬菜の見本園、果樹園を設けて観覧者の参考に供しつつあったが今期は増植及び補植を行い完璧を期した。

且旧協会敷地に昨年度より見本園を設け水稻、小麦の優良品種を栽培、工芸作物、花卉蔬菜、を育成して同じく観覧に供して居ったが一層の充実整備を図った。開館第六年現在の陳列点数は次の如くである。(1938(昭和13)年8月10日現在)

各部門 種類ごとの展示資料数

1936(昭和11)年 標本模型数：5,293点 特別模型数：68点 写真及び図：548点

統計図表：146点 その他189点 合計6,190点

1937(昭和12)年 標本模型数：4,868点 特別模型数：73点 写真及び図：619点

統計図表：156点 その他 86点 合計 5,802点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列模型を包括す

移動農業博物館

部門 イ、拓殖農業 内訳：満州 南米 朝鮮 台湾 ロ、多収穫 ハ、土壌 内訳：土壌 肥料
ニ、副業 ホ、生活改善 ヘ、経済更生 ト、園芸

1937(昭和12)年度 図表写真模型：213点 標本：369点 合計 582点

本山考古室

農業博物館三階北端にあり故本山前理事長三十年間の苦心の蒐集を展覧し我が国考古学上貴重な役割をなす陳列品数千点に特別研究者のみに参観を許している。

名士の参観と入場者（名士の入館日は省略）

日本勸業銀行総裁 石井光雄氏、大阪府知事 池田清氏、拓務省管理局長 棟居俊一氏
フイリピン農商務大臣 ロドリガス氏、海軍大将 竹下勇氏

開館第五年度(1936(昭和11)年度) 開館日数：307日間 入場者：29,034名
(1936(昭和11)年8月11日～1937(昭和12)年8月10日)

開館第六年度(1937(昭和12)年度) 開館日数 310日間 入場者：23,958名
(1937(昭和12)年8月11日～1938(昭和13)年8月10日)

前年比：5,076名の減

展覧会と移動博物館

博物館の機能をよりよく発揮するために陳列品に拘泥することなく、各種の展覧会や講演会を開き入場者の啓発に努めているが、今期は時局認識に寄与せんとして係員を北支に派し資料蒐集の上、北支資源展覧会を東京、大阪、京都に開催し、事変講演会、軍事講演会及び北支座談会を催し対外的に飛躍活動した。

なお積極的には地方にあって本博物館の恵澤に浴し得ない人々のために予てより申込に応じて移動農業博物館を貸出して、農業知識の向上に資するところがあったが、本期間の活躍は常備の貸出以外に陳列品中より消費節約関係及び北支資料を外部の展覧会に貸出し大いに気をはいた、今期のこれらの活動は次の如くであった。

展覧会 4回(36日間) 講演会及講習会 7回(7日間) 移動農業博物館 18回(18日間)

展覧会

11月1日から5日間	菊花展覧会、支那事変写真ニュース点
4月1日から10日間	北支資源展(於本館)
4月19日から12日間	北支資源展(於東京科学博物館)
4月30日	支那事変講演会(於東京)
5月19日から9日間	北支資源展(於京都丸物百貨店)

講演会及講習会

10月2日	第五回全日本富民研究会大会
-------	---------------

10月2日	支那事変講演と映画の会
2月11日	紀元節奉祝映画会
4月24日	北支講演と映画の会(於東京)
5月20日	北支資源座談会(於京都)
7月7日	支那事変一周年記念講演会

移動農業博物館

10月23日	東京市財団法人佐藤新興生活館生活展覧会
10月27日	山口県柳井町経済更生資料展覧会
12月2日	奈良県磯城農学校品評会
1月18日	大阪市高島屋北支博覧会
3月14日	滋賀農試農業改善資料展
3月28日	滋賀県山林会共進会
6月16日	大阪松坂屋家庭報国展
(他11件)	

観覧規定抜粋(省略)

資料⑤

農業博物館の第八年⁽⁸⁾

農業博物館の使命

わが農業博物館こそは東亜生活圏の礎石たる東亜農業の興隆に寄与せんことを目的とするものである。実に本館こそ日、満、支農村大衆に最新の農業知識を摂取、味得せしむる生きた指標であり光明である。本館に醸さるる生氣発刺進取への気魄はやがて農を興し、國を興し、東亜を興す一大原動力をなすに至ることを確信する。即ち本館の設立趣意書は、その使命を明らかにしている。

農業博物館建設趣意書(省略)

建物概要(省略)

部門と陳列品に就いて

本博物館はその使命とするところにに基づき、努めて通俗平易を旨とし、農村大衆の容易にその真髓に接せんことを期した。これがための農産物及び加工品の如き単調なる陳列品をも観覧者をして倦まざらしめんため特に陳列装置に苦心を払い、電動装置を多く取り入れ、観覧者をして倦怠なく会得せしむべく努めた。幸いにして昭和7年8月10日開館以来江湖の喝采と好評

を博し創設満八年、常に内容の改善、拡充に努力し来った。畏くも昭和11年12月、天皇皇后陛下格別の思召により、宮城内御水田において御生産にかかる水稻及び種籾、紅葉山御養蚕所において御生産にかかる蚕繭及び生糸を標本として本館に御下賜の恩命を拝したことは恐懼措かざるところである。本館の陳列は右御下賜品を中心とし、常に更新、補充に努めつつあるが、本年度においては、時局下農業生産の重要性を認識せしむるため米穀の増産計画、臨時配合肥料等の資料を蒐集展示するほか甘藷、菜種等の多収穫競作資料をも陳列し、時局認識の強化に寄与せんことを期した。また、本年度は移動農業博物館のほか、紀元二千六百年奉祝記念事業として興農二千六百年展覧会を企図し、歴世興農のあとに報恩感謝し、志士仁人尊農の徳を製作して、希望団体に貸出し農業報国精神の振作に裨益するを大であった。

本館の陳列は一階、二階及び三階の一部に設備され、一階は第一室皇室と農業部、第二室土壤肥料部、第三室農産部、二階は第四室農政經濟部、第五副業部、第六室拓植農業部、第七室外国農業部とし、三階の一部を本山考古室としている。

各部門の点数が前年に比し増加セルは時局に鑑み陳列品蒐集に努め、新資料の充実を図りたるによる。開館第八年現在の陳列点数は次の如し。

1939(昭和14)年 標本模型数：5,625点 特別模型数：75点 写真及び図：771点
統計図表：143点 その他139点 合計6,753点

1940(昭和15)年 標本模型数：5,851点 特別模型数：76点 写真及び図：780点
統計図表：172点 その他160点 合計7,039点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列を包括す

移動農業博物館

部門 イ、拓殖農業 内訳：満州 南米 朝鮮 台湾 ロ、多収穫 ハ、土壤肥料 内訳：土壤 肥料
ニ、副業 ホ、生活改善 ヘ、経済更生 ト、園芸

1940(昭和15)年度 図表写真模型：272点 標本：388点 合計660点

本山考古室

農業博物館三階北端にあり、故本山理事長三十年間の苦心の蒐集を展観し我が国考古学上貴重な役割をなす陳列品数千点に上り、特別研究家にのみ参観を許している。

名士の参観と入場者（名士の入館日は省略）

勸業銀行総裁 石井光雄氏、京都帝国大学教授 農学博士 竹崎嘉徳氏、農林政務次官 岡田喜久治氏、大阪府知事 半井清、大阪営林局長 平岡梓氏、日本文化中央連盟理事 貴族院議員 松本学氏
京都帝国大学教授 農学博士 橋本傳左衛門氏、京都帝国大学教授 経済学博士 黒正巖氏

開館第八年度(1939(昭和14)年度) 開館日数：312日間 入場者：39,663名

(1939(昭和14)年8月11日～1940(昭和15)年8月10日)

前年(1938(昭和13)年8月11日～1939(昭和14)年8月10日) 入場者 30,847名

前年比：8,816名の増加

展覧会と移動博物館

博物館の機能を一層発揮し、以て農村分化の向上進展に資するため各種展覧会、講習会、懇談会、映画会、研究会等を展示開催し、入場者の啓発に努めているが、今期は特に時局の認識を徹底せしむるため、興農二千六百年展覧会を全国主要都市に開催し、農業報国精神の振作に努めたのである。このほか傷病勇士招待会、支那事変三周年記念講演会、外米炊方料理講習会、園芸懇談会、先進地園芸視察旅行等を行い、以て銃後の農産増殖に資するところ多大であった。また、遠隔の地にあつて本博物館の恵沢に浴し得ざる地方人に対しては申込みに応じ移動博物館を貸出し以て農業知識の啓培に資すること甚大であった、本期間中の行事は次の如くである。

展覧会 11 回 (66 日間) 講演会及び講習会 15 回 (20 日間) 移動博物館 19 回 (19 日間)

展覧会

(1939(昭和 14) 年)

- 11 月 1 日 - 7 日 第五回菊花展覧会
- 4 月 1 日 - 5 日 春の花と、小鳥展覧会並びに植木市開催
- 7 月 23 日 - 30 日 大阪府下教育作品展覧会

興農二千六百年展覧会

(1940(昭和 15) 年)

- 2 月 20 日 - 28 日 京都市丸物百貨店
- 4 月 9 日 - 14 日 大阪市高島屋
- 4 月 23 日 - 29 日 福岡市玉屋呉服店
- 5 月 8 日 - 12 日 岡山市天満屋
- 6 月 8 日 - 13 日 福井市福屋
- 7 月 10 日 - 12 日 松山市 愛媛県教育会館
- 7 月 20 日 - 21 日 兵庫県 加古川町公会堂
- 8 月 7 日 - 14 日 金沢市 宮市大丸

講演会及び講習会

(1939(昭和 14) 年)

- 8 月 19 日 第 7 回特別見学会 (白菜、大根)
- 9 月 23 日 第 8 回特別見学会 (秋播草花)
- 10 月 21 日 第 9 回特別見学会 (栄養料理)
- 12 月 9 日 第 10 回特別見学会 (養鶏)

(1940(昭和 15) 年)

- 2 月 24 日 第 11 回特別見学会 (惣菜育苗)
- 3 月 9 日 大阪府下園芸家懇談会
- 3 月 27 日 西瓜栽培研究会
- 4 月 13 日 第 12 回特別見学会 (稲増収)
- 4 月 20 日 - 22 日 全国富研中堅幹部講習会

- 5月4日－5日 兵庫県淡路地方園芸視察会
- 5月18日 第13回特別見学会（果菜類）
- 7月7日 支那事变三周年記念講演会
- 7月13日 外米炊方と料理講習会（図16）
- 8月9日－11日 園芸改善講習会
- 8月17日 第14回特別見学会（秋の惣菜）

移動農業博物館

(1939(昭和14)年)

- 10月15日 滋賀県山林会 林業報国会
- 11月1日 山形県最上郡 時局農事展
- 11月4日 大阪府農学校 農畜産品評展
- 11月5日 秋田県長野富研 農村更生展
- 11月5日 山口県麻里布町 畜産共進会
- 11月8日 秋田県清水富研 清水農民祭
- 11月19日 香川県鎌田共済会 興亜資料展
- 11月19日 熊本県球磨農 郷土博記念展
- 11月25日 滋賀県栗田農 農産物品評会
- 11月30日 兵庫県三田農 製作品評会
- 12月1日 奈良県磯城農 農業教育展
- 12月15日 滋賀県愛知郡農会 農業展
- 12月17日 和歌山県熊野農 農産物展
- 12月20日 和歌山県紀南農 農産物展

(1940(昭和15)年)

- 1月20日 広島県忠海高女 興亜教育展
- 2月6日 三重県新居富研 農業展
- 2月11日 山梨県農産課 米節約展
- 2月24日 兵庫県杜高女 学芸展
- 7月7日 兵庫県和田富研 富民運動展



図16 外米の炊き方講習会

資料⑥

農業博物館の第九年⁽⁹⁾

農業博物館の新使命

博物館施設が朝野に要求されること今日の如く急なるはない。東亜共栄圏の建設といい、高度国防国家の建設というも、一に国民大衆の認識と自覚に俟つにあらざればその完遂を期することは不可能といってよい。博物館こそはこの間に処して、常に清新なる資料を陳列展示して、国民大衆に国防国家体制の要を知らしめ、東亜共栄圏の実情を把握せしむるもの。然かるに我

が国博物館事業未だ幼稚の域を脱せず、隔靴搔痒の感を抱かしむるに止る。

わが農業博物館規模小にして、また農業の領域に蟠居すと雖も、常にその視野を大東亜の興隆に致し、国民食糧の増産に寄与せんことを期する一面、また消費規正に微力を致さんとし、以て博物館事業の使命たる大衆の指導と教養に粉骨の努力を傾倒しつつある。すなわち本館の建設趣意書こそ、本博物館の使命をよく表すものである。

農業博物館建設趣意書 (省略)

建物概要 (省略)

部門と陳列品に就て

本博物館はその使命とするところに基き、努めて通俗平易を旨とし、農村大衆の容易にその真髓に接せんことを期した。これがため農産物および加工品の如き単調なる陳列品をも、観覧者をして倦まざらしめんため、特に陳列装置に苦心を払い、電動装置を多く採り入れ、観覧者をして倦怠なく会得せしむべく努めた。幸にして昭和七年八月十日開館以来江湖の好評を博し、創設満九年常に内容の刷新拡充に努力し来った。畏くも昭和十一年十二月、天皇、皇后両陛下格別の思召により宮城内御水田において御生産にかかる水稻及び粳種、紅葉山御養蚕所において御生産にかかる、蚕繭及び生絲を標本として本館に御下賜の恩命を拝したことは恐懼措かざるところである。本館の陳列は右御下賜品を中心とし常に更新補充に努めつつある。

本年度においては時局下特に農業生産の重要性を一層認識せしむるため米穀増産計画、節米及尊米、本協会が近畿二府五県下に実施の米穀集団地多収穫競争の成績等を展示し、以て米穀増産の一大指針となし更に南進日本の緊急性に鑑み、南方共栄圏内の農林、鉱産資料を蒐集陳列して大東亜共栄圏確立の聖業完遂に邁進すべきことを示唆した。

本館の陳列は一階、二階及三階の一部に設備され、一階は第一室皇室と農業部、第二室土壌肥料部、第三室農産部、二階は第四室農政経済部、第五室副業部、第六室拓殖農業部、第七室外国農業部とし三階の一部を本山考古室としている。

各部門の陳列は時局に鑑み重点主義を採り整理淘汰を加へ若干の減少を示している。開館第九年現在陳列点数は次の如くである。

1940(昭和15)年 標本模型数：5,851点 特別模型数：76点 写真及び図：780点
統計図表：172点 その他160点 合計7,039点

1941(昭和16)年 標本模型数：5,839点 特別模型数：79点 写真及び図：770点
統計図表：162点 その他155点 合計7,005点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列模型を包括す

移動農業博物館

部門 イ、拓殖農業 内訳：満州 南米 朝鮮 台湾 ロ、多収穫 ハ、土壌 内訳：土壌 肥料

二、副業 ホ、生活改善 ヘ、経済更生 ト、園芸

1941(昭和16)年度 図表写真模型：281点 標本：388点 合計 669点

本山考古室

農業博物館三階北端にあり故本山前理事長三十年間の苦心の蒐集を展観し我が国考古学上貴重な役割をなす陳列品数千点に上り、特別研究家にのみ参観を許している。

名士の参観と入場者（名士の入館日は省略）

日本博物館協会会長 陸軍大将 荒木貞夫氏、貴族院議員 子爵 澁澤敬三氏

大阪府知事 三邊長治氏、農林省食品局長 辻 謹吾氏

中部防衛司令部陸軍少将 吉野栄一郎氏

開館第九年度(1940(昭和15)年度) 開館日数：308日間 入場者：37,858名

(1940(昭和15)年8月11日～1941(昭和16)年8月10日)

前年(1939(昭和14)年8月11日～1940(昭和16)年8月10日) 入場者 39,663名

前年比：1,805名の減

展覧会と移動博物館

博物館の機能を一層発揮し、以て農村文化の向上進展に資するため各種展覧会、講習会、懇談会、映画会、研究会などを屢次開催し、入場者の啓発に努めているが、今期は特に時局の認識を徹底強化するため、興農二千六百年展覧会を前期に引続き全国主要都市に開催し、農業報国精神の振作に努めたのである。このほか農談会、研究会、支那事変四周年記念講演映画会、園芸即売展覧会、園芸座談会、家庭園芸教室並特別見学会等を開設し、以て銃後の食料増産に資するところであった。また、遠隔の地にあつて本博物館の恵沢に欲し得ざる地方人士に対しては申込みに応じ移動博物館資料を貸出して農業知識の啓培に資することとした。本期間中の行事は次の如くである。

展覧会 3回(33日間) 講演会並園芸教室 7回(7日間) 映画会 4回(4日間)

興農二千六百年展覧会 10回(66日間) 移動博物館 15回(50日間)

展覧会

1940(昭和15)年11月1日－7日 第六回菊花展覧会 (図17)

1940(昭和15)年11月3日－23日 泉州園芸品評即売会

1941(昭和16)年4月23日－27日 家庭園芸展覧即売会

講習会並園芸教室

1940(昭和15)年8月11日 園芸講習会並新農薬座談会

1941(昭和16)年1月18日 園芸教室馬鈴薯増収栽培

1941(昭和16)年2月22日 園芸教室夏作蔬菜育苗法

1941(昭和16)年3月15日 園芸教室家庭的果樹栽培

1941(昭和16)年4月13日 特別見学会米穀多収穫栽培

1941(昭和16)年5月17日 園芸教室果菜類の栽培

1941(昭和16)年6月15日 園芸教室病虫害防除法

映画会

1940(昭和15)年11月10日	紀元二千六百年奉祝映画会
1941(昭和16)年2月11日	紀元節奉祝映画会
1941(昭和16)年5月27日	海軍記念日映画会
1941(昭和16)年7月7日	支那事変四周年記念映画会

興農二千六百年展覧会

1940(昭和15)年8月7日－14日	金沢市宮市大丸百貨店
1940(昭和15)年9月4日－8日	佐賀市玉屋百貨店
1940(昭和15)年9月19日－25日	岐阜市丸物百貨店
1940(昭和15)年10月6日－9日	香川県鎌田図書館
1940(昭和15)年10月20日－23日	新潟市萬代百貨店
1940(昭和15)年11月1日－7日	東京市伊勢丹百貨店
1940(昭和15)年11月15日－21日	秋田県立花輪高等女学校
1940(昭和16)年1月29日－31日	広島市福屋百貨店
1940(昭和16)年4月23日－27日	奈良市奈良会館
1940(昭和16)年7月8日－13日	大阪市阪急百貨店

移動農業博物館

1940(昭和15)年10月16日－17日	京都府立福知山中学校
1940(昭和15)年10月21日－23日	山形県最上郡新庄町農会
1940(昭和15)年11月22日－24日	高知県立高知農業学校
1940(昭和15)年11月27日－12月1日	宮崎県立高知農業学校
1940(昭和15)年11月29日－30日	奈良県立南葛城農学校
1940(昭和15)年12月6日－7日	奈良県立磯城農学校
1940(昭和15)年12月9日－10日	宮崎県立飴肥農学校
1940(昭和15)年12月13日－15日	和歌山県立熊野林学校
1940(昭和15)年12月24日－26日	広島県田熊富民研究会
1940(昭和16)年2月25日－27日	香川県立木田農業学校
1940(昭和16)年3月5日－7日	香川県大川郡農会
1940(昭和16)年3月14日－17日	香川県立大川農業学校
1940(昭和16)年5月10日－19日	大阪市城北公園家庭園芸展
1940(昭和16)年5月19日－21日	島根県立仁萬農林学校
1940(昭和16)年5月29日－30日	島根県立仁萬青年学校

資料⑦

農業博物館の第十年⁽¹⁰⁾

わが十年を省みて

我が農業博物館が濱寺公園羽衣松の畔に開館したのは昭和7年8月10日のことであった。爾来歳を閲すること十年、未だその内容の完璧を誇り得ざるを憾みとする、ただ我等の窃かに欣快とするところは我が農業博物館が、農業の分野における我が国唯一最大の存在であり、その陳列展示において他の追随を許さざる創意と工夫に充たされていることである。



図17 第六回菊花展覧会

だがそれとて大東亜戦争以来の躍進日本と歩調をともにし得るものではない。我等のなすべき領域の如何に拡大されたことか。我等は微力を南方に注ぎ南方資源資料の蒐集に心血を傾倒しつつある、日を追ってこれらの資料は全館に陳列展示され、大東亜の農業博物館としての使命を達成することであろう。大東亜の人口七億五千万、その八割が農業に従事する限り、農業の重要性は愈々加重したものであり、その中核をなし、その指導力をなすもの一に我が国農業でなければならぬ、その意味からいって我等の任また重きを加ふるのみである。

我等はここに創設当時富民協会設立者故本山松陰翁によって発表された本館の建設趣意書を掲げて翁の先見達識に敬意を表することとしよう。

農業博物館建設趣意書（省略）

建築概要（省略）

部門と陳列品に就て

本博物館はその使命とするところに則り、努めて通俗平易を旨とし、農村大衆の容易に農業の眞髓に接せんことを期した。これがため農産物及び加工品の如き単調なる陳列品をも観覧者をして倦まざらしめんがため、特に陳列装置に苦心を払い、電動装置を多く採り入れ、観覧者をして倦怠なく会得せしむべく努めた。

殊に大東亜戦争勃発以来、国家の要請する主要農産物を重点的に陳列展示し、肥料その他の生産資材についても自給を主とするよう多分に指導性を加へたのである。幸にして昭和七年八月十日開館以来江湖の好評を博し創設以来ここに十年、殆んど旧態を止めざるに至った。畏くも昭和十一年十二月 天皇、皇后両陛下格別の思召により宮城内御水田において御生産にかかる水稻及び粳種、紅葉山御養蚕所において御生産にかかる蚕繭及び生糸を標本として本館に御下賜相成ったのである、聖恩の優渥に我等はただ恐懼感激するのみである。

本年度においては戦時下特に農業生産の重要性を認識強化せしむるため本協会が東西日本に昭和十六年度施行した米穀集団地多収穫統計の実績を展示し米穀増産の一大指針とするほか南方共栄圏各地の農林鉱資料を蒐集展示し大東亜資源の全貌を把握せしめんことを期した。

本館の陳列室は一階、二階及び三階の一部に設備され、一階は第一室皇室と農業部、第二室土壌肥料部、第三室農産部、二階は第四室農政経済部、第五室副業部、第六室拓植農業部、第七室外国農業部とし、三階の一部を本山考古室としている。開館第十年の陳列点数は次の如くである。

1941(昭和16)年 標本模型数：5,839点 特別模型数：79点 写真及び図：770点

統計図表：162点 その他155点 合計7,005点

1942(昭和17)年 標本模型数：5,168点 特別模型数：73点 写真及び図：615点

統計図表：150点 その他144点 合計6,150点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列模型を包括す

移動農業博物館

部門 イ、拓殖農業 内訳：満州 南米 朝鮮 台湾 南方 ロ、多収穫

ハ、土壌 肥料内訳：土壌 肥料ニ、副業 ホ、生活改善 ヘ、経済更生

ト、園芸展覧会 チ、地支

1941(昭和16)年度 図表写真模型：310点 標本：388点 合計698点

本山考古室

農業博物館三階北端にあり故本山前理事長三十年間苦心蒐集の資料を展覧し我が国考古学上貴重な役割をなす陳列品数千点を蔵し特別研究者のみに参観を許している。

名士の参観と入場者

海軍大将 末次 信正氏、元内務大臣 安井 英二氏

本期間 1941(昭和16)年 開館日数：310日間 入場者数38,033名

(1941(昭和16)年8月11日～1942(昭和17)年8月10日) 前年比：175名の増

開館以来の開館日数3,091日、入場人員累計352,299名

展覧会と移動博物館

農業博物館の機能を高度に発揮し農村文化の向上に資するため各種展覧会、講習会、農談会、映画会、研究会を屢々開催し入場者の啓発に努めているが、今期は特に家庭蔬菜園による食糧自給の一端に資するため大阪市と共同主催の下に休閑地利用蔬菜栽培講習会を開催したほか各種資料をこの種の催しに貸出し銃後食糧の増産に資するところがあった。

また遠隔の地にあつて本博物館の恵澤に浴し得ざる地方人のために移動農業博物館を設け各種資料の貸出しを行ふこととし、本年度には国防と食糧、食糧増産はなぜ必要か、東亜共栄圏の農産資源などを製作したのであるが、輸送関係により貸出回数は前年度より減退するに至つた。本期間中の行事は次の如くである。

展覧会 3回 (21日間) 講演会その他 5回 (5日間) 移動博物館 10回 (10日間)

展覧会

- 1942(昭和17)年 4月25日 - 28日 第二回家庭園芸展覧会
- 1942(昭和17)年 6月8日 - 14日 報国農業週間
- 1942(昭和17)年 8月5日 - 14日 少国民教育作品展覧会

講習会その他

- 1941(昭和16)年 8月31日 第九回家庭園芸教室
- 1941(昭和16)年 11月22日 新穀感謝祭
- 1942(昭和17)年 3月11日 休閒地利用蔬菜栽培講習会
- 1942(昭和17)年 4月11日 第十回家庭園芸教室
- 1942(昭和17)年 7月5日 第十一回家庭園芸教室

移動農業博物館

1941(昭和16)年

- 10月27日 山形県 新庄町 食糧増産品評会
- 11月10日 新潟県 高田農 農業大展覧会
- 11月18日 名古屋市産業部 謝農展覧会
- 11月30日 奈良県南葛城農 農産物品評会
- 12月7日 和歌山県熊野林 農林産品評会
- 12月20日 和歌山県紀南農 農林産物品評会

1942(昭和17)年 (図18)

- 1月23日 大毎名古屋支社機動隊
- 4月21日 大阪食糧国防団 食糧国防展
- 5月16日 大阪毎日新聞社 園芸指導展
- 7月28日 大毎神戸支局 隣保菜園共進会



図18 和歌山県熊野林 農林産品評会

資料⑧

農業博物館の第十一年⁽¹¹⁾

農業博物館の新使命

国家総力の統合發揮を要請せられる決戦下、博物館の負荷する使命も自ら動能に鋭感な展開態勢を必要とするは論を俟たない。大東亜共栄圏といい、南方資源というも、これらを国民大衆に認識づけるは一つに博物館の負荷すべき新使命的重圧であらねばならぬ。

わが農業博物館が故本山松陰翁の先見達識により昭和7年8月10日濱寺公園羽衣松畔に開館してより爾来十有一年。この間克くその趣意を體し「邦家農事の指導啓発」に微力を致し來れるもさらに時局の發展に即応し、視野を遠く大東亜の興隆に致し、国家資源の認識強化と、国民食糧の増産に寄与し、併せて消費規正に微力を蓋し以て使命の重大に応へ国家的要請に即応すべく努力を傾倒しつつある。以下本山翁建設趣意書を掲げて本館の使命を再認したい。

農業博物館建設趣意書 (省略)

建物概要 (省略)

部門と展示品

本館はその使命と設立の趣旨に鑑み農村大衆への迫力ある実物教育に徹するとともに、大東亜戦争勃発以来国家の要請する主要食糧農産物の増産、肥料その他生産資材の自給化、あるいは消費の規正等、国策順応の積極的指導に格別の意を用い、学界月歩の進展に対応してはその業績の普遍化と、撓まざる展示の創意工夫に努めもって「農業科学生ける指標」たらしめんことを期しつつある。特に本年度における大東亜共栄圏なかんづく南方諸邦の重要農林鉱資源の充実強化により、大東亜資源の全貌把握を愈々完璧ならしむるを得たのは、国策重要作物の重点的更新と相俟って時局に即応する博物館の新発足を企図しつつあり。

展示方法においても、これを多く電動装置、あるいは立体化に求め、不断の新鮮味と、平易なる解説による理解の容易、浸透に全力を傾注し、以て江湖の期待に対へつつある。本館の陳列は一階二階及三階の一部をこれに充て一階は第一室皇室と農業の部、第二室土壤肥料の部、第三室農産の部とし二階は第四室農政経済の部第五室副業の部、第六室大東亜資源の部に分ち三階の一部に本山考古室を設け翁生前の蒐集にかかる出土の稀品を藏置している。

畏くも昭和十一年十二月 天皇 皇后両陛下格別の思召により宮城内御水田において御生産にかかる水稻及び粳種、紅葉山御養蚕所において御生産にかゝる、蚕繭及び生糸を標本として本館に御下賜の恩命を拝したことは恐懼措かざるところである。右御下賜品を中心とする本館第十一年の陳列点数は次の如くである。

1944(昭和 19) 年 標本模型数：5,168 点 特別模型数：73 点 写真及び図：615 点
統計図表：150 点 その他 144 点 合計 6,150 点

1943(昭和 18) 年 標本模型数：4,754 点 特別模型数：53 点 写真及び図：309 点
統計図表：128 点 その他 90 点 合計 5,334 点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列模型をいふ

移動農業博物館

部門 イ、ナゼ食料の増産が必要か 11 点 ロ、反当り六石二斗を実収するまで 9 点
ハ、大東亜共栄圏の農業 9 点

1942(昭和 17) 年度 資料点数：合計 29 点

貴顕名士の参観と入場者

本館は開館忽々にして梨本元帥宮殿下御成の光栄を辱し、ついで高松宮 (昭和十一年)、東久邇宮 (昭和十年)、朝香宮 (昭和十三年)、李王妃、李玖 (昭和十五年) 各殿下を迎へ奉る光栄に浴したに止らず高松宮殿下よりは有栖川宮記念厚生資金を賜り、梨本宮殿下よりは御染筆を拝

受するの恩命を拜した、洵に感激に堪へざる次第である。朝野の名士また続々来観され故齋藤首相、鳩山、後藤、荒木、山本、山崎、永田、島田、八田、安井の各大臣を相ついで迎へた。

本期間 1942(昭和17)年8月11日～1943(昭和18)年8月10日

開館日数：308日間 入場者数 30,110名

開館以来の開館日数 3,390日、入場人員累計 382,410名

各種展覧会と移動博

本館はつとに博物館の積極的活用の一分野として各種展覧会、講習会、農談会、映画会、研究会等を屢々開催し、入場者の啓発、農村文化の向上に努力してきたが、決戦下の食糧増産、利用についてはひとりその対照を農村に限定することなく、広く一般都会市民にも之を及ぼし、都市における休閑地利用、家庭園芸の普及指導等にも力をいたし愈々使命の分野を展開しつつある。また遠隔の地にあつて本博物館の利用あまねからざる地方農村のためにとくに移動農業博物館を設け、各種資料の貸出しを行ひつつある。

その内容は従来、経済更生、多収穫、園芸、拓殖農業其他の八部門標本図表等総点数約七百余を有したが、昨年来時局の要請に即応し、重点的な刷新を断行、主力を食糧増産及大東亜共栄圏農業の認識強化に集中し、これら決戦下の農業関係重要問題の開明に努めた。

本期間における主要行事は次の如くである。

展覧会 2回(4日間) 講演会その他 9回(9日間) 移動博物館 5回(5日間)

展覧会

1943(昭和18)年4月24日－26日 第三回家庭園芸展覧会

1943(昭和18)年5月1日 第二回家庭園芸即賣会

講習会其他

1942(昭和17)年8月23日	第三回家庭園芸教室
1942(昭和17)年9月20日	第一三回家庭園芸教室
1942(昭和17)年11月2日	新穀感謝祭竝童話童踊会
1942(昭和17)年11月29日	第一四回家庭園芸教室
1943(昭和18)年1月31日	第一五回家庭園芸教室
1942(昭和18)年2月28日	第一六回家庭園芸教室
1942(昭和18)年4月18日	第一七回家庭園芸教室
1943(昭和18)年5月29日	第一八回家庭園芸教室
1943(昭和18)年6月9日	決戦食糧炊方講習会

移動農業博物館

1942(昭和17)年

10月19日	大每名古屋総局移動文化隊食糧増産展
11月6日	朝鮮慶南全海農食糧増産展
11月28日	京都府立亀岡農農村文化展

11月27日
1943(昭和18)年
4月14日

和歌山紀南農紀南農林産物品評会
大分県玖珠郡森町農会

資料⑨

農業博物館の第十二年⁽¹²⁾

農業博物館の新使命

大東亜千年の運命を決すべき聖戦は、既に三年の歳月を、荒々しく送り迎へた。国家総力の結集と発揮が今ほど喫緊の使命を担って要請される時は、過去三千年の歴史にその例を見ない。一切は戦ふ、われ等農業博物館もまた必勝態勢の下に、雄々しく飛躍と充実を図らねば成らないことは論を俟たぬ。農逞しければ兵強く、農こそ皇国立国の大本であり、兵農一致の完璧を誇るところ、輝かしい聖戦完勝の光栄ある日を約束されるのである。

わが農業博物館が、故本山松陰翁の先見達識によって、濱寺公園羽衣松畔の白砂青松の地に開館して爾来十二年櫛風沐雨の世の風潮の中にあつて、よく所期の使命とその趣旨を体し『農家農事の指導啓発』に皇国の進路とともに歩みを一つにし、撓まざる努力と微力を捧げて今日に至つた。

殊に、共栄圏農業の確立と南方資源の開発、更に今日緊急の課題である食糧の自給自足と云ふ、重要問題に正しい認識を与えるものは、一つに博物館の負荷すべき新しい責務であらねば成らない。われ等は、敵前決戦下にあつて、尚一層の発奮と努力を致し、国家の要請に即応すべく覚悟を新にするものである。以下故本山松陰翁の建設趣意書を掲げて本館の使命を再認したい。

農業博物館建設趣意書(省略)

建物概要(省略)

部門と展示品

本館は開館以来、陳列部門と展示についてはその設立の使命と趣旨に鑑みあく迄平易を旨とし農民大衆に迫力ある実物教育を提供する事として来つたが、駸々として変遷の一路を進む大東亜戦争勃発後の情勢に即応し、常に新しい酒は新しい革囊に盛る必要から不斷に展示の創意工夫に努め、新しい時代の『農業科学の生ける指標』たらしめんことを期して来つた。

視野を広くすれば、今日の日本農業は南方諸邦との関係の下に重点的更新を把握する必要あり、特に大東亜共栄圏の重要農林鉱資源の全貌を知悉することが急務である。そのため現下の主要食糧農産物の増産、肥料その他の生産資材の自給化、消費の規正等の国内諸問題と併行して、共栄圏地域の展示材料を充実完璧たらしむべく、格別の意を用いまた学界月歩の進展に対応してはその業績の普遍化と展示に新機軸を企図しつつある。

これ等の問題を解説するには多くの電動装置と立体化に求め、不断の新鮮化を全館に浸透、以って江湖の期待に応へつつある。

畏くも、昭和11年12月、天皇皇后両陛下格別の思召により、宮中御水田において御生産にかかる水稻及び粃種、紅葉谷御養蚕所において御生産にかかる蚕繭及び生糸を標本として、本館に御下賜の恩命を拝したことは恐懼措かざるところである。右御下賜品を中心とする本館の陳列は、一階を第一室皇室と農業の部、第二室土壌肥料の部、第三室農産の部とし、二階は第四室農政経済の部、第五室副業の部、第六室大東亜資源の部に分ち、三階の一部に本山翁生前の蒐集にかかる出土の稀品を蔵置している、以上を総括して本館第十二年の陳列点数は次の通りである。

1943(昭和18)年 標本模型数：4,754点 特別模型数：53点 写真及び図：309点

統計図表：118点 その他90点 合計5,324点

1944(昭和19)年 標本模型数：4,856点 特別模型数：53点 写真及び図：351点

統計図表：154点 その他112点 合計5,526点

備考 特別模型とはジオラマ、電気照明及び機械応用陳列模型をいふ

貴顕名士の参観と入場者

本期間(1943(昭和18)年8月11日～1944(昭和19)年7月12日)

開館日数：284日間 入場者数24,853名

開館以来の開館日数3,674日、入場人員累計407,263名

展覧会3回(5日間) 講演会その他9回(9日間) 移動博物館4回(4日間)

展覧会

1943(昭和19)年5月4日 第三回家庭園芸即売会

1943(昭和19)年5月5日、6日、7日 第四回家庭園芸展覧会

1943(昭和19)年11月3日 戦時菜園品評会

講習会其他

1943(昭和18)年7月18日 第十九回家庭園芸教室

9月5日 第廿回家庭園芸教室

1943(昭和18)年11月7日 秋の園芸指導会

1943(昭和18)年11月23日 第三回新穀感謝祭

1943(昭和18)年11月28日 庭園芸見学並講習会

1944(昭和19)年2月20日 第廿一回家庭園芸教室

1944(昭和19)年3月21日 第廿二回家庭園芸教室

1944(昭和19)年4月16日 第廿三回家庭園芸教室

1944(昭和19)年6月4日 第廿四回家庭園芸教室

移動農業博物館

1943(昭和18)年9月17日 広島食糧営団 食生活工夫展

1943(昭和18)年10月1日

兵庫県農試創立記念展

1943(昭和18)年11月9日

大阪文化施設協会 戦ふ研究展

1943(昭和18)年12月8日

大阪地方生産増強推進隊 戦ふ女性生産展

観覧規定抜粋

一、本館の観覧料は左(下)の三種とす

大人 一人一回 二十銭

小人 一人一回 十銭 (十二才以下六才以上)

団体 学生 三十人以上 一人一回 五銭

一般 五十人以上 一人一回 十銭

一、本館開閉の時限左(下)の如し

三月十六日より十一月末日迄

午前九時 — 午後五時

十二月一日より三月十五日迄

午前九時半 — 午後四時半

見学記・観覧記等からみた農業博物館の展示と評価

次に、当時の博物館建設及び開館にかかわった人々の残した報告・見学記・観覧記等からその展示内容及び評価についてみてみたい。

まず、本山は、農業博物館設立趣意書の中で展示について「陳列展観に於いても所謂在来の博物館に見る陳腐なる羅列主義を排し、清新発洩独自の境地にあって、現代日本農業の経営に必要な気魄と、科学の生ける指標を示さんことを期してをる」と述べ⁽¹³⁾、最新の農業に関する研究成果と新たな発想のこれまでにない展示をおこなうとしている。

開館の一年後、1933(昭和8)年9月に刊行されている『農業博物館の一年』を見ると展示資料について、各部門の種類ごとの展示資料数が記されている。それには、標本・模型 4,530点、特別模型 47点、写真・絵図 706点、統計図表 148点 合計 5,431点の数字が示されている。⁽¹⁴⁾

備考には、特別模型はジオラマ・電気照明及び機械応用陳列模型を示すと記されている(図6・9・10・11)。また、残っている展示室・展示状況の写真(図3・4・7・8)から観てもかなりの点数の資料が展示されていたことが分る。このようなことから後で紹介する足立圃圃の観覧記にもあるように展示は少し過密な状態であったのではないかと想像できる。



図19 富民協会多収穫競争入賞の稲

農業博物館の自己評価については、「日本農村大衆の生きた指標としてどこまでも農民の実生活に食い込んだ日本農業の一大殿堂である。大衆とともに生きる生命の躍動と気魄はやがて不況農村克服の原動力をなすものであらうことを確信する。見よや独自の境地にあって最新農学の粹を集めてなる陳列の数々を！総面積九百余坪、陳列面積五百余坪、二百に余る陳列ケースに盛られたる農業資料の数々は、その斬新澁澗たる陳列方法と相俟っていやが上にもわが国最初の農業博物館の光栄を価値づけるものである。」としてその内容を誇っている。⁽¹⁵⁾

開会式に列席した富民協会農業博物館創立委員のひとりである東京科学博物館の学芸官森金次郎の視察報告によると、農業の基本の部分である土壌肥料部における土壌の断面模型(図6)、岩石の風化分解を示す標本、肥料となる大豆粕の製造を示す人形・肥料の標本、農産部においては各府県の300種に余る標準米の陳列、米の多収穫に関する資料、普通作物に係る有害有益獣草の標本、ボタンを押せば映るエンドレスフィルムによる小型活動写真映像装置(映像タイトル「米の一生」)、茶の製造工程模型(モーター運転仕掛)、煙草・油蠟等の各種工芸植物の原料製品・標本とその写真やイラスト・図表・模型、品種改良資料と研究成績の提示等、副業部の竹林ジオラマ・農政経済部の栄える農村と衰える村を比較した回転式ジオラマ(図10)、農家経営に関する農林省出品の図表、農村電化と農業の効率化を示す模型等を挙げ、「学理に偏せず通俗に流れず、其の双方を調和し趣味ある中に農業の科学知識を民衆に植え付けんとしたる点は敬服の外はない」と評価している。⁽¹⁶⁾

展示の詳細は別の機会に触れるが、森金次郎の記した展示資料に、『農業博物館案内』⁽¹⁷⁾、『農業博物館のしおり』⁽¹⁸⁾をあわせてみると観覧者に興味を持たせ、その理解を助ける工夫をしていることがわかり、現在において展示を媒介とした観覧者と学芸員のコミュニケーションを図る姿を想像させる。

1934(昭和9)年2月に観覧した足立僭圃は、展示について「農業に対する科学の応用とその効果が観る物事に現れ、陳列に新機軸を出した跡がありありと見えている」と評価する。⁽¹⁹⁾しかし、一方で「あまり多くの陳列、あれもこれもと考えると、場所の狭きに至った、一略一限りある場所に余り多くを容れすぎた感があり、また、農民大衆の教育を目標とした博物館としては科学に傾倒し過ぎ学理に偏し過ぎた感がないでもなかった」と批判的な評価もする。また、その対象とする観覧者については「農学校卒業生位の程度のものに示すには極めて格好である。一略一所謂鋤鋤を擲って草鞋掛で参観するものにはよほど詳しく説明せざれば、諒解に苦しむものも少なくないであろう」とし、多くを占める一般農民を主たる対象とすることには少し無理があるのではないかとしている。

ただ、富民協会農業博物館として、「一般の大衆農家を目標とすべきか、相当の知識階級を目標とすべきか」議論のあるところであるが、一般の農家大衆を主たる対象者にすることが、博物館設立の趣旨にも添うことであり、その存在意義を示すことになるとする。

そして、最後に「本館の設置は能く時代の要求に適應し、その陳列品および陳列の方法が陳腐の羅列主義を排して、動的に指導的に清新澁澗たらしめ、所謂陳列に生命あらしめたるは他に比類を見ざる処にして、観るものをしてケースの前に立ちて顧望去る能わざらしむものが多い。」と最大

級の賛辞を送っている。

観覧記の中で足立は自身が本山彦一の主導した児島湾開拓事業において部下として携わり、相談を受けていたと記している。また、本山を評して「翁は能く人に聴き能くことを断ずるの美質を持って居られた一略一農法を協議し、忌憚なく各員の意見を吐かしめ、翁もまたその所見を陳述し、議塾すれば断乎としてその実施に邁進された」と記し、本山について、他の人の意見を取り入れる柔軟な思考力とその上で判断をし、決まったことを実行できる優れた人物であると評している。

足立僭圃の人物像については、明らかではないが、農業博物館の展示を観て記したその評価は、本山と足立の個人的な人間関係を明らかにしつつ、観覧者の視点を一つではなく複数の立場から農業博物館の展示を評価していることが注目される。

最後に富民協会評議員であり、京都帝国大学農学部教授 橋本傳佐衛門⁽²⁰⁾の評価をみると、「農業博物館は、畜農村大衆のみでなく、進んで社会大衆に対する広い意味の農業教育機関であるが、国家といえども、これを設立することが出来なかつたに拘わらず、翁の力で、我国に初めて設けられ、且つその最も進歩した組織を持つ点において、世界の他の文明国にも多く比を見ない」と簡潔に述べ、最高の評価をしている。⁽²¹⁾

活動記録から観た農業博物館

農業博物館の展示室を中心とした屋内の面積が、約3,000㎡、年度により変化はあるものの常設展示資料点数は標本資料・模型・ジオラマ・写真・イラスト・図表・その他をあわせて約6,000～7,000点という状況は、現在における地方自治体の博物館と単純に比較しても勝るとも劣らないものといえる。また、上記に示した各年度の「陳列の部門と陳列点数」を見ると毎年展示更新がおこなわれていることも数字の上から知ることができる。

普及教育活動を観ると、展覧会(特別展)、講演会・講習会等、土曜講座、映画会、移動博物館という活動がおこなわれている。その他、残された画像の一つに「理科講義をきく小学生 農業博物館にて」という説明のついたものがあることから、展示室において学生への解説や団体入館・個



図20 理科講義を聞く小学生



図21 財団法人 富民協会 富民寮

入館した入館者へ解説をしていたことが想像できる。(図20)

展覧会の開催場所は、主に農業博物館ではあるが、特に紀元二千六百年にかかわり1940(昭和15)年から翌年の前半にかけて東京・福岡・愛媛県松山市・石川県金沢市などの遠方の会場において『興農二千六百年展覧会』を開催している。

なお、農業博物館の展覧会の会期は『興農二千六百年展覧会』も含め、5～10日間の会期で開催されている。講演会・講習会は、1日、2～3日間の開催がほとんどであるが、農業講習会として3ヶ月の長期講習が実施されている例もある。また、農業夏季大学・全日本富民研究大会などもおこなわれている。これらの講習会は農業博物館ができる前は、富民協会でおこなわれていたもので、長期間の講習に対応するため富民協会には宿泊施設も用意されていた。⁽²²⁾(図21)

移動農業博物館は当初その項目は見られないが、確認できる記録では『農業博物館の第四年』からその名称を見ることができる。ただ、『農業博物館の一年』に項目として「参考品貸出」という項目があり、これが移動農業博物館に該当する項目ではないかと思われる。

内容については活動の記録に移動農業博物館において開催された年月日と開催場所名を冠した展覧会名が記載されているもの、開始場所の後に内容の判る名称が記載されたものなど、記録により違いがある。また、会期についても期間が明示されているものと始まった日だけが記されたものなど統一性がない。各年度の活動記録には項目として「移動農業博物館」、出品資料の手がかりとなる部門名とその内訳が記載され、それぞれの当該年度の資料数が挙げられており、数多くの資料が用意されていたことが判る。

他に内容の手がかりになるものとしては、『富民協会十年史』⁽²³⁾に島根県松江農林学校において開催された状況を写した写真が掲載されている。その写真をみると、車に載せ移動させやすい軽量小型の標本資料や写真・イラスト・図表を中心に構成したのではないかと考えられる。(図22)

以上、活動内容の概略を見てきたが、各年度の記録を全体としてみると1940(昭和15)～41(昭和16)年の紀元二千六百年に関わる頃が最盛期であった。先にも触れたが、本山彦一の皇室に対する想いを引き継いでいた富民協会農業博物館は、1940(昭和15)年2月から41(昭和16)年7月にかけて18回112日間に渡って興農二千六百年展覧会を全国各地で開催している。

また、移動農業博物館は、同じ期間に都合34回83日間実施されている。また、開催場所は、熊本・愛媛・島根・山梨・東京・秋田などの全国各地で開催されている、そして『農業博物館の第四年』においては当時日本の領土であった樺太においても開催されていることが記録されている。この他、講演会及び講習会を23回28日間、展覧会を6回43日間、映画会を4回4日間おこなっている。日程を重ね合わせてみるとそれぞれの活動が重なっていたり連続してい

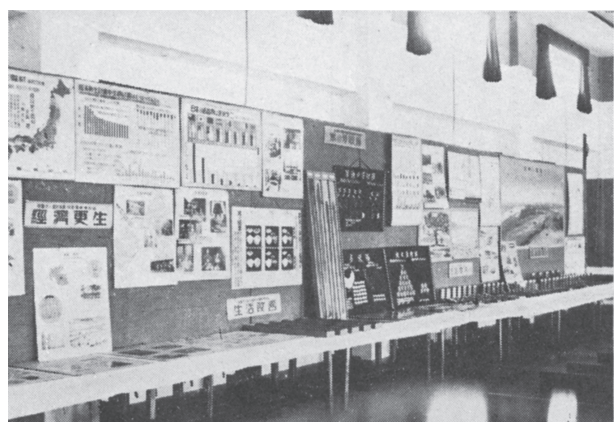


図22 移動農業博物館の展示状況

たりと過密な日程で事業をおこなっていることが判る。

次に、記録として開館当初から当時において貴顕名士と表現される人々が頻繁に農業博物館を訪問している。例を挙げると昭和天皇の使者として小出侍従の派遣、梨本宮、東久邇宮などの皇族の訪問、政治家としては内閣総理大臣 齋藤實、農林大臣 後藤文夫、内務大臣 山本達郎、農学関係者として農学博士 新渡戸稲造、京都帝国大学教授 農学博士 竹崎嘉徳、その他 日本勧業銀行総裁 石井光雄、日本博物館協会会長 陸軍大将 荒木貞夫など多数の人々が来館している。

このことは、本山彦一の新聞人・経済人・文化人としての個人の業績と評価、長年おこなってきた社会事業とその中での財団法人富民協会設立・農業博物館建設という活動に対する評価の現れではないかと考えられる。そして本山彦一の遺志を引き継ぎ、農民の生産活動とその生活の改善を図るための事業及び活動をおこなってきた農業博物館も同様に評価されていたものと思われる。このような状況において1936(昭和11)年10月に日本博物館協会主催により日本博物館協会総会並びに第7回全国博物館大会が農業博物館・大阪市立美術館・法隆寺の三者共催で開催される。⁽²⁴⁾

終わりに

日清・日露戦争、金融恐慌などにより景気の好不況の波にさらされ疲弊する農村の状況を憂慮していた本山彦一は、農業に従事する人々の生活改善、更に農業経営の改善を図るため、富民協会を設立した。そしてそこでおこなわれる様々な農業に関する事業とともに、実際の農業・農民の生活に、直接役立つような実地教育に結びつく教育的配慮をした展示をおこなう農業博物館を構想し、実現したのではないかと考えられる。

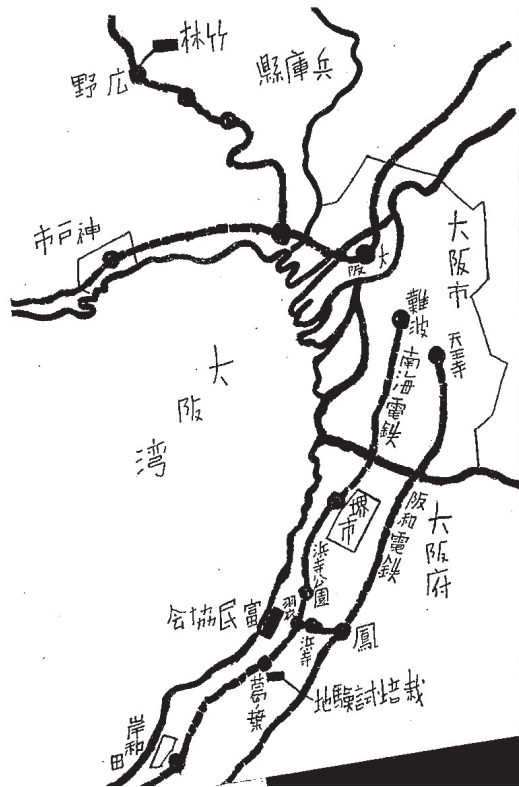
これは、片山清一が、明治期に農政の変遷にともなって変わってゆく農業教育に対して「農業について学問がどのように積み重ねられたとしても、実際に実地に農業をどう営んで行くかを知らないならば、いかに奥深い学識でも何の役にも立たないものだ」という批判を受けるのは当然のことである。」と指摘している⁽²⁵⁾ ことと無関係ではないと考えられる。

本山彦一自身も農民も含めた庶民の窮状をそれまでの経歴と新聞社社長として入ってくる社会状況の情報から認識し、農業関係の事柄については片山と同様の考えを持つようになり、財団法人富民協会設立、農業博物館建設に繋がっていったものと考えられる。また、他方では、山口卓也が別項で触れている『大阪毎日新聞慈善団』にみられる社会福祉・慈善活動などの社会事業にもかかわっていくことになる。

当時の社会状況の変遷、富民協会の活動などとも合わせて農業博物館の姿を捉えていく必要がある。

註

- (1) 『農業博物館の第四年』財団法人富民協会 1936(昭和11)年
- (2) 『農業博物館の一年』財団法人富民協会 1933(昭和8)年
- (3) 『新日本農業の指標 農業博物館案内』『農業博物館の第四年』付属パンフレット 財団法人 富民協会 1936(昭和11)年
- (4) 『農業博物館の一年』財団法人富民協会 1933(昭和8)年
- (5) 『農業博物館の第四年』財団法人富民協会 1936(昭和11)年
- (6) 会期50日間の展覧会は、「大毎主催 輝く「日本大博覧会」「豪州の農業」の二大出陳をして気をはいた。」とあることから主催展覧会ではなく、資料貸出の展覧会であったと思われる。
- (7) 『農業博物館の第六年』財団法人富民協会 1938(昭和13)年
- (8) 『農業博物館の第八年』財団法人富民協会 1940(昭和15)年
- (9) 『農業博物館の第九年』財団法人富民協会 1941(昭和16)年
- (10) 『農業博物館の第十年』財団法人富民協会 1942(昭和17)年
- (11) 『農業博物館の第十一年』財団法人富民協会 1943(昭和18)年
- (12) 『農業博物館の第十二年』財団法人富民協会 1944(昭和19)年
- (13) 「富民協会の設立とその業績」『松陰本山彦一翁』大阪真美日新聞社内 故本山社長伝記編纂委員会編 1937年 p452-454
- (14) 註4に同じ p2-4
- (15) 註3に同じ 「農業博物館というもの」項目参照
- (16) 森金次郎「大阪市外に新設の農業博物館」『自然科学と博物館』第33号 東京科学博物館 1933(昭和8)年 p8-11
- (17) 『農業博物館案内』財団法人 富民協会 1936(昭和11)年
- (18) 『農業博物館のしおり』財団法人 富民協会 1940(昭和15)年
- (19) 足立僭圃「農業博物館を観て」文化農報3月号 文化農報社 1934(昭和9)年 p72-75
- (20) 橋本傳佐衛門 京都帝国大学教授(農学博士) 専門は農業経営学
主な著書『農業経営学』『農業政策要綱』『農業土地問題』
1887(明治20)年 生まれ 1977(昭和52)年 没
1910(明治43)年 東京帝国大学農科大学卒
1925(大正13)年 京都帝国大学教授 農学部長、農場長を歴任
1947(昭和22)年 退官 日本初の農業計算学講座を大学に設置 京都大学名誉教授
- (21) 「富民協会の設立とその業績」『松陰本山彦一翁』大阪毎日新聞社内 故本山社長伝記編纂委員会編 1937(昭和12)年 p455 引用文だと考えられるが、引用文献の註はない
- (22) 青年宿泊所富民寮 農業博物館の近隣に建設されていた
- (23) 『富民協会十年史』財団法人富民協会 1937年 p57
- (24) 日本博物館協会「第7回全国博物館大会日程」『博物館研究』第9巻11号 1936年 p189
- (25) 片山清一著『近代日本の農業教育』高陵社書店 1983年 p49



富民協会本部地図（富民協会十年史）